



Veritas No.47(2011.7.21)

目次 (敬称略)

<悪書が良書を駆逐することのないように>

濱下 昌宏 (図書館長)

<特集 夏休みに読んでほしい、読みたいこの一冊>

大橋 完太郎 (総合文化学科)

三浦 欽也 (心理・行動科学科)

中川 徹夫 (環境・バイオサイエンス学科)

井出 敦子 (院長室)

宮本 憲子 (視聴覚センター)

<本の花束 ーその7ー>

樋口 徹 (図書館)

<研究室から>

中村 昌弘 (英文学科)

<史料室から>

佐伯 裕加恵 (史料室)

<雑感>

金城 盛紀

無断転載を禁ず

## <悪書が良書を駆逐することのないように>

濱下 昌宏 図書館長 総合文化学科教授

昭和の三大おしゃべり、という称号が与えられているのは、丸山真男、桑原武夫、そして加藤周一だそうである。御年92歳におなりで、なお学会で研究報告をされるという、私が敬愛して止まない怪物のような先生（学士院会員）からうかがった。同世代だからそんな陰口をたたくのだろう。三人の共通点は？ 基本は洋学者、ということか。東洋的な「巧言令色鮮仁」などという忠告には耳を貸さないインテリ先生ぞろいであり、いわゆる「進歩的文化人」「岩波文化人」ということか。それでは、平成のおしゃべりを挙げてみると、三人ではすまないようだ。皆さん現存かつ現役なので固有名を挙げるのは控えるが、共通点は？ 詩心の欠如、病的なほどの自己顕示欲、性格の小児性、といったところだろうか。昭和勢がそれでも学者であって学問の水準を謙虚に守ろうとされたのに対して、平成勢の特徴は大学や学問への軽視であろうか。あるいは、昭和の先生方がそれでも学問の怖さを体得されていたのに比して、平成饒舌組は端から研究をナメているように見える。もっとも、そうした態度は今日の大学の状況を象徴している。大学に職を持っていれば、世の売文業者たちとはちがって最低生活は保障されているのだから世に受け入れられなくても良い仕事を、と考えたいところだが、売らんが為に、注目を集めんが為に“精神の売淫者”（ボードレール）に墮している方々はメディアの小間使いさながらである。媚俗を恥としない、そうした本が平積みされている書店には香気が漂わないのは当然であろう。そして重厚な、何十年もの研鑽の成果である本は棚の下段の隅に置かれている。

昨今の「判断なき研究」(Forschung ohne Urteil)を嘆いておられた私の旧師は、30年余の昔、論文指導に際して、参考文献を渉猟し片っ端から読破しようとする私に対して、「本はたくさん読む必要がありません。良い本だけ読みなさい」と諭してくれた。博覧強記を嫌い、大向こう狙いの態度を憎み、学会発表に際しても「色気を出してはだめですよ」と警告された。いま私が常々学生に教えようとしている、たくさんの知識や技法ではなく、良い絵を見せ、良い音楽を聴かせ、良い本を読ませ、美味を堪能させること、それによって判断力を身につけさせようとするのは、思えば、それは旧師の影響を自分なりに受け止めたからかもしれない。

そして、学生たちから質問される、それでは良い絵、良い音楽、良い本とはどのようなものですか、と。その時、教師としての質や能力が試されていると痛感する。じつはそれこそが難事であって、それが不首尾ゆえに今日の大学と大学生の体たらくがあると言ってもよいだろう。

良書とは何だろうか？ 今やそれを選び出して読むのは、相当に目利きでないと不可能なのかもしれない。良い本とは、むしろ、ベストセラーなどというシロモノではない。

私の良書判別法も、たいしたマニュアルがあるわけではないが、1995年の阪神淡路大震災時には、自然と淘汰がなされた。あのころ電気だけが早く復旧しながら、水とガスというライフラインが3ヶ月ほど止まったとき、自宅に居てできることは読書くらいであった。私の蔵書もあたりかまわず散乱して、絶望状態で一冊ずつ手にとって本の傷みを確かめるのが精神的にも精一杯の作業であったが、その時、本の良否はみごとに現われた。研究する者として所蔵する文献の多くは商売道具のようなものであるが、研究の継続すらどうなるか希望を失いかけている精神状態では、まさにニーチェの言う「血で書かれた書物」の何たるかが自ずと見えてきた。時間を超え災害を乗り越えて残った本だけを読めばよいのだ。たしかにひとは、同時代のメッセージにも誘惑される。しかし、触れ合う人間も自然と選別されるように、政治家の根回しではあるまいに、無理な似非友達作りのような、話題づくりの読書などは避けるべきなのだ。

ということは、良書の楽しみは悠久の営為ということか。フォースターは言う、「高尚な楽しみは酒や盃とはちがう」、と。「それはむしろ宗教に似ていて、末代まで伝えようと努力をしないと味わえない」。良書との関わりは芸術作品の傑作との出会いに比される。「芸術品を楽しもうとする人は、その人なりに芸術家にならざるをえず、自分に伝えられたものを伝えるまでは落ち着かないのである。この「伝達」衝動には、たんに教育したがるという形もあれば批評という形をとる場合もあるが、本質的に心の奥に潜んでいる火から発する光であり、これを消すのは福音が広まるのを禁じるのと同じである。「文化にかかわる福音にとって必要なのは、自分の光を強く明るくして人々の好奇心をかきたて、人々の方から、なぜソポクレスは、ベラスケスは、ヘンリー・ジェームズはこれほどおもしろいのですか、と訊かせる力なのである」。したがって、「われわれの主な仕事は、自分が楽しんできた感性を失わないことであり、親しい仲間が好きだからというより、ほかに似たものがない無限の価値を持っているものがあって、それに奉仕するために我々を世の中へいわば押し出すように思えるというので、文化をひろめることなのである。・・・それは自分に伝えられてきたものを伝えたいという熱情なのだ。芸術品にはこういう、人を突き動かす独特の力がある。それが創られたときの興奮が作品のまわりに漂っていて、その力を感じた人々を小型の芸術家に仕立てるのである」（「文化の価値」『フォースター評論集』岩波文庫）。私ども年長者に傑作との「出会い」と「感性」（判断力）と伝えようとする「熱情」がなければ、そこでは悪書がはびこるのであろう。

森銑三はずばり「良書とは何ぞや」という随筆で語っている（森銑三・柴田宵曲著『書物』岩波文庫）。「書物過多の現状」と題された一節につづけて良書を話題とするその話は

正統的である。つまり、古典的な、文は人なりの思想である。「文は人なりという。然らば書もまた人なりとってよい。書物は著者の分身に外ならぬ。いやしくも人たる以上は、その品性の高下を問わず、これを待つに人格者を以てすべきである」。「良友に親しみ、悪友を避けよというのと同様に、良書に親しみ、悪書を避けよということが何人にもいわれるだろう」。「誠実な心の持主にして始めて良書は生み出される。然らば書物の問題は直ちにその著者の問題となる。良書を知ろうと心懸くる人は、まずよき著述家を知ることを心懸くべきである」、と。こうして、良書の向こうに人格を見よ、というのが、世に傑出した読書人森銑三の主旨であろうが、しかし、作者とその作品（書物）とを区別するという態度を習いとす現代人には理解しがたい。本さえおもしろければ作者の品格などどうでもよいのではないか、と。それもまた、ニュー・クリティシズムといった用語を出さずとも拝金一元論の時代の影響なのかもしれない。それでもなお、作者同士が、あるいは作者と読者とが共鳴しあうのは、本に示されている論弁・説話の魅力というよりは、まさに文体に現われている人格ゆえであろう。岡倉天心とタゴールの友情は、両者の英文の格調高い文体をみれば理解できるだろう。たしかに、われわれは文体から作者のことを容易に推し量ることができる。

<特集 夏休みに読んでほしい、読みたいこの一冊>

大橋 完太郎 総合文化学科専任講師

レベッカ・ソルニット 『災害ユートピア』 高月園子訳、亜紀書房、2010

今年の夏はさぞかし暑くなるだろう。ひょっとしたら、この原稿が発表される頃にはすでに酷暑が到来しているかもしれない。節電節電と喧しい昨今の事情を鑑みれば、冷房の効きが甘くなることは承服せざるを得ない。そしてなぜ節電が必要となったのかということに僅かでも思いを巡らすならば、関西の一都市からは決して伺い知ることのできないような大きな深淵が本州の東の端にぽっかりと空いてしまっていることに気づくはずだ。深淵、と言っただけではいけないのかもしれない。その近隣には住民がなおも住んでいるだろうし、固い意志をもって現地での活動に従事する作業員の姿も目にすることができるだろう。だがそれでもその地帯が空白になったかのように考えてしまう自分の心の内には、その地域が——ひいては日本が——今回の震災と原発事故で測り知れないダメージを受け、当面の間洗い流されることのない汚れが土地に沁み込んでしまったのではないかと、という考えがある。汚泥や瓦礫に形を変えて、この「汚染」がやがて日本中を駆け巡ることになるのではないかと、そういう不安もある。だからせめてこの夏くらいは、そうした不安や不安をかき立てる現実と直面し、自分たちの将来を前向きに考えるための時間をもちたいし、いろんな人にその時間をもって欲しいと思う。現地に行くことが適わないとしても、せめて考えよう——脅えるためにではなく、立ち上がり、立ち直る力を創り出すために。

そんなときに読む「この一冊」の本をあえて選ぶならば、今回の震災で一躍脚光を浴びたレベッカ・ソルニット著『災害ユートピア』（高月園子訳、亜紀書房、2010年）になるだろうか。災害状況という「地獄」のなかで自分の負の感情が消え去り、ただ生きるためだけに他者と連帯し喜びを見いだす人びとの姿を描いたこの本は、社会科学・人文科学の区別なく、人間存在とコミュニティ形成に関心があるすべての人が読むに値するだろう。シビアな状況のなかでも人間が発揮しうる強さや創造力が、豊富な事例を通して描かれている。文学・思想の分野からもよく似たテイストの本をあげておこう。ひとつは坂口安吾の『白痴』（新潮文庫など）。空襲の焼け野原を舞台に、奇妙な関係をもった一組の男女のむき出しの姿が遠慮ない筆致で書かれている。赤裸々で強靱な生への意志が極限状態で閃くのを読者は目にするだろう。もうひとつは花田清輝『復興期の精神』（講談社文芸文庫など）。第二次大戦の敗戦一年後に出版されたこの著作は、ダンテやレオナルド、はたまたスピノザやゲーテなど、西洋近代の巨匠に関する評論集という形をとりつつも、滅亡しつつあった日本と残存せるその文化を鼓舞せんとする花田の強い意志を行間にみなぎらせている。前者『白痴』は肉の力を、後者『復興期の精神』は知の力を信じさせてくれる書物だ。自らのポテンシャルを信じて、よく考えよく動くならば、復興はいつか、きっと叶う。思い起こしてみるといい。六十五年ほど前、焦土と化した大地から人びとが立ち直り始めたのも、あの暑い夏の日からだったということ。

三浦 欽也 心理・行動科学科准教授

M. エンデ、E. エブラー、H. テヒル 『オリーブの森で語りあう – ファンタジー・文化・政治』 丘沢 静也訳、(『エンデ全集』第15巻) 岩波書店、2006

この本は、「モモ」や「はてしない物語」の著者として有名なミヒャエル・エンデ、政治家のエアハルト・エブラー、劇団主宰者のハンネ・テヒルが、ローマ近郊のエンデの自宅で、ファンタジーや文化や政治（これは副題にもなっています）について2日間にわたって語りあった鼎談の記録です。30年近くも前に書かれた本なのですが、ここで話されている内容は決して古くなく、当時から現在を見通していたかのような、その鋭い現状分析に驚かされます。

今回この本を取り上げたのは、ポジティブな（未来の）ユートピアを思い描くことが私たちに必要である、というこの本の主張の一つが、昨今ますます重要になっていると感じるからです。それは、私たちが自分たちの社会をどのような方向に変革していくのか、その方向性を与え、また、その方向へ進んでいく勇気を与えるものであるからです。

なぜ、私たちにとって、ポジティブなユートピアを思い描くことが、かくも困難なのか、それを克服するにはどうすればいいのか。もちろん明確な答えがあるわけではありませんが、この本は、その問題を考える際に、大いに参考になると思います。

会話の記録ですから、教科書のように系統立てて書かれてはいませんが、説明的でもありませんから、必ずしも読みやすい本ではないのですが、順に読まなくても拾い読みでもよいと思いますし、断片的に読んでも、随所に印象的な言葉があり、知的な刺激には事欠かないと思います。是非一度手に取って見て下さい。

中川 徹夫 環境・バイオサイエンス学科教授

米沢富美子 『猿橋勝子という生き方』 (『岩波科学ライブラリー』157) 岩波書店、2009

みなさんは猿橋賞をご存知だろうか。地球化学者猿橋勝子博士(1920-2007)が創設した賞で、自然科学の分野で顕著な業績をあげた50歳未満の女性科学者に贈呈される。受賞者はいずれもその分野の研究をリードした方々である。ちなみに2011年の第31回猿

橋賞は、東京学芸大学の数学者溝口紀子博士に与えられた。しかし賞の生みの親である猿橋自身の生涯については、あまり知られていない。

本書は、本邦初の猿橋の評伝である。著者の米沢富美子博士は、理論物理学者でアモルファス研究の第一人者だ。そして第4回猿橋賞の受賞者でもある。著者は執筆の目的として、猿橋勝子の軌跡を伝えること、猿橋が生前かなえられなかった自伝を評伝の形で実現することに加え、若い女性たちに勇気を与えることをあげている。

本書は、執筆までの経緯、プロローグ、本文7章、エピローグ、執筆を終えて、の各部から構成されている。本文は119頁であり、平易な表現で綴られているので、1日あれば十分読了できる。巻末にある年譜や受賞歴も、猿橋の生涯を知るうえで参考になる。

猿橋は帝国女子理学専門学校（理専）卒業後、中央气象台嘱託を経て気象研究所の研究官として勤務した。この間、海水中の炭酸塩の研究に従事し、国際的に評価の高い「サルハシの表」を完成させた。そしてこの間の研究成果を学術論文として次々に発表し、東京大学から理学博士の学位を取得した。まさに、努力の人である。

猿橋は生涯、「自分へのまわりからの処遇や研究環境が望ましいものでなくても、それで落ち込んだり、それに対して抗議したり、という反応をするのではなく、研究成果を上げ、実績を積むことで、自分のことを皆に議論の余地なく認めさせる」という態度を貫いた。評者も研究者の一人として、大いに見習いたい。

本書を読み、わが国を誇る猿橋勝子先生の生涯を是非知ってほしい。そして本学の卒業生から、猿橋先生に続く優秀な研究者が次々と輩出されることを期待したい。評者が自信をもって推薦できる1冊である。

なお米沢富美子先生の自伝も出版されている（「まず歩き出そう」、岩波ジュニア新書616、岩波書店、2009年）。併せて読まれることをお勧めする。

井出 敦子 院長室職員

新美南吉 『手ぶくろを買いに』 黒井健・絵 岡本明・装丁（『日本の童話名作選』 偕成社、1988

新美南吉(1913.7.30-1943.3.22)は、愛知県半田市の出身、その短い生涯の中で教員をしながら珠玉の作品をいくつか遺しました。没後間もなく刊行された『手袋を買いに』(1943)が、絵本作家の黒井健の絵を得て「大人の絵本」と銘打った偕成社の『日本の童話名作選』に収録されています。お母さん狐の子狐への溢れるような愛情、抱きしめたいほ

どにいとおいしい子狐の心情に、きっと人間の住む町へのお買い物が無事にうまく行きま  
すように、ひどい目にあったりしませんように、結末を知っていても、それでも読むたび  
に心から願わずにはいられない、そんなお話です。

未曾有の大災害に見舞われた日本列島にあって、新美南吉が追求した「生存所属を異に  
するものの魂の流通共鳴」（絵本のカバーより）を思い、無邪気に人間への信頼を語る子  
狐の傍らで、お母さん狐からは「ほんとうに人間はいいものかしら。」と問いかけられて  
いることも心に留めながら、遠く離れた他者をも思いやることを覚える、この夏は、そん  
な気持ちと共にありたいと思うのです。

宮本 憲子 視聴覚センター職員

ニーチェ 『ツアラトゥストラ』上・下 吉沢伝三郎訳（『ちくま学芸文庫』[二・1・9・  
10]）筑摩書房、2010

「ニーチェ」と言えば「神は死んだ」。合言葉「山」「川」のようになぜか言えてしまう  
言葉だが、多くの人はその著作を丁寧に紐といたことはないだろう。かく言う私もその一  
人である。読んだつもりで読めていない、分かったつもりで分かってない。ニーチェには  
そんな逃げ水のようなところがある。巷でニーチェがはやっている。実は日本ではニーチ  
ェ・ブームは過去に何度も起きており、1900年ごろにもニーチェがはやった事があった。  
しかしそのブームを森鷗外や田山花袋は冷ややかな目で眺めた。一過性のブームに踊らさ  
れる人々には深いところでヨーロッパへの理解がなかったからである。

今、ニーチェを読む人々は、その作品だけでなく、ニーチェの人となりや古典文献学の  
天才としての業績に思いを馳せているだろうか。一生涯、病や失恋、冷遇に苦しんだ人間  
くさいニーチェ。その経験があるからこそ得られる力強さがある。本書は主人公ツアラト  
ウストラが10年間山にこもって得た知識(贈り物)を群衆に語るという形式をとっている。  
ツアラトゥストラの言葉が限りない人間賛歌に聞こえる。

※図書館では濱下教授を囲んで定期的に読書会を開催しています。現在第3回を終了して  
いますが、今年はニーチェ「ツアラトゥストラ」を読み進めています。途中参加でも問題

ありません。興味がおありの方は、図書館までお問い合わせください。

## <本の花束 ーその7ー>

樋口 徹 図書館職員

もう間もなく長い夏休み、いろいろと楽しい計画をたてていらっしゃる方も多いと思います。

この猛暑の中、炎天下でスポーツをしようという方は少ないかも知れませんが、スポーツに限らず、様々な娯楽、ゲーム、趣味等、広義の「遊び」について、その起源と今日に至るまでの変遷を取り上げた本があります。

ジョン・アーミテージ『イギリス人はどう遊んできたか：「遊び」の社会史ー娯楽に見る貧富の格差』（三友社出版 2011年）

本書では過去約900年に渡ってヨーロッパ、特にイギリス人がどのように遊んできたか、その「遊び」はどのような変化を遂げてきたか、その変化の要因は何であったかということについて、イギリス社会史と照らし合わせながら簡明に述べられています。

たとえば、王侯貴族が特権として独占していた娯楽の一つである狩猟など、かつて庶民は決してその楽しみを味わうことは許されなかったのですが、その代償として同様の楽しみを得るために発生したのが今日のフットボール（サッカー）の起源である、との考察が示されます。「遊び」の多くに階級間の格差があり、それは根本的には土地を所有するか、どれだけ多く所有するかという問題に帰するというのが著者の説です。野蛮と見下されていたフットボールも時とともに上流階級に受け入れられ、今日ではイギリスの国民的スポーツとなりました。それは階級間の格差を越えて人間が持つ、「遊び」を通して喜びを得たいという強い欲求と、社会の変化が合わさった結果といえます。（それでもラグビーとサッカーの格差はいまだに大きいようですが。）

ところで、多くの場合スポーツはその起源の時点で、プレイヤーとしての女性の参加を排除していますが（それは女性を忌避したというより、その最初のかたちがあまりにも野蛮で、時には血みどろの殺し合いに至ることまでであったからかも知れません）、本書はその後時間をかけて女性がそこに参加していく過程についても触れています。

最近のスポーツの国際的大会（テニスの全英オープン、ゴルフの全米オープン、女子サッカーのワールドカップ・・・）、日本はとりわけ女子の活躍が目立ちます。スポーツをす

る人も見るだけの人も、その歴史を知れば楽しみもまた一層増すことかと思えます。

## <研究室から>

中村 昌弘 英文学科准教授

花と虫



今日は僕のポートフォリオから、ちょっとだけ特別な写真を紹介します。

高い空がいわし雲に覆われていたある秋の日に、撮影旅行で訪れた長野で撮ったものなので、ちょっと季節はずれです。しかも、写っているのは被写体としての魅力に劣る皺の寄ったコスモス。花は、形と色という二つの基準で最も美しいと評価できるものだけを被写体として選定すべしとする光画術における基本セオリーを基だしく逸脱してしまいました。

でも、そこにはシジミ蝶が憩っていたのです。くたびれて花弁の先端から枯れかけてもなお蝶に蜜を惜しみなく与える。そんなコスモスの姿にちょっと心を打たれました。

青年と中年の端境期にあって、まるでこの写真のコスモスの花びらのように、年月が体表に刻んだ痕を認むようになってきた今日この頃。もしも人生が錬金術なら、鉛が黒化を経て黄金へと変容するように、一旦失われた輝きも再生し得るのだろうけれど、硫黄も塩も水銀も、弾けるような瑞々しさを取り戻す秘薬としては現実には不十分で、急速に失われてゆく若さという青いパトスに郷愁とも思しき感情を覚えつつ、悪戯にすり込みを許してしまった集団のエートスに抗う姿勢を捨てきれずにいるくせしてそれに迎合してゆく自

分を静かに振り返るとき、境目がいつだったかは曖昧模糊として分かりようがないけれど、大人になるという過程が老いるという過程にいつの間にかすり替わってしまっているのだということに気付いて、少し慄く・・・

そんな気持ちが心の中に巣くっていたからでしょうか、老いつつある存在としてのくたびれたコスモスが、エーテルの海を自在に飛び回る魂の自由と若さの権化のような蝶に、その生きる糧を提供しているという光景が、ある種の啓示にも似た鮮烈さで目に飛び込んできたのです。畏怖と畏敬の念を込めた掌でカメラをしっかりと抱えつつ、そっと近寄り、心臓の鼓動より静かにシャッターをきりました。

老いるということは死にゆくということ。でもそれは紛れもなく生きるということの裏返し。であるならば両者は互いに不可分の一体をなす概念であって、形而下の現象を超越した世界では或いは等価なものなのかも知れません。

枯れつつある花は、花冠の美しさではもはや人を魅了できないかもしれません。でも蜜腺にそっと蓄えた花蜜で虫を養ってやることはできるのです。そんな自然の味わい深さを想うとき、クロノスのたゆたう流れを憂えることに意義などないことに気付くのです。

## <史料室から>

佐伯 裕加恵 史料室職員

神戸女学院岡田山キャンパスに込められた思い（4）

— Miss Susan Annette Searle —

岡田山キャンパスシリーズの第4回目はソールチャペルを取り上げてみようと思います。

皆さんは講堂の横（講壇からいえば裏）に小さな礼拝堂があるのをご存知ですね。えっ、知らないって！？ そういう人はまず、見に行ってください。小さな扉の向こうに、とても美しく荘厳な雰囲気のあるチャペルがありますから。さて、ここで質問を一つ。このチャペルの名前は何でしょう。そう、「ソールチャペル」と呼ばれていますね。この「ソール」、どういう意味かわかりますか？ カタカナで書いてあると、魂や霊をあらわす soul のことかしらと思ってしまいます。礼拝堂ですしね。英語では Searle と書きます。しかも大文字

で始まります。そうです。これは人の名前からきています。Searle Chapel、第4代院長であったソール先生を記念しているチャペルなのです。正式には「ソール記念礼拝堂」といいます。

神戸女学院第4代院長スーザン アンネット ソール先生 (Miss Susan Annette Searle, 1858-1951.) は、1883年に神戸の女学校の教師として来日し、1899年から1915年まで院長をつとめ、退任後も名誉院長として1929年まで神戸女学院で奉仕されたアメリカンボードの宣教師でした。

ソール先生が赴任した頃の神戸女学院は、英和女学校 (Kobe Girl's School) と呼ばれていて、中学校程度の教育機関でした。アメリカのリベラルアーツ大学であるウェルズレー カレッジを卒業した先生は、第3代校長・院長で、友人でもあったエミリー マリア ブラウン先生 (Miss Emily Maria Brown, 1858-1925.) の片腕として働き、ブラウン先生とともにはじめた女子高等教育を引き継いで、今日の神戸女学院 Kobe College の基礎を築きました。

この先生の名前がチャペルに付けられたのには大きな理由があります。それは先生の人となりです。岡田山キャンパス移転を記念して作られた『新築記念帖』(1934年)には次のようにあります。(以下、旧字は現代字に改めています。)

「スウザン・エー・ソール女史 (Miss Susan A. Searle) の本学院に於ける生活の特徴は『徹底的』の一語に尽きる。物事の微細な点にまでよく注意し、生徒個々の事に就いては、その在職中に生徒数が二倍以上に増加したにも拘らず、絶えず細深の関心をもって居た。(略) 生徒の精神的幸福に対しては、最大の関心を有ち、宗教的学科の教授はその最も得意とするところであった。講堂の礼拝や寄宿舎の集り等の講話に於ても、明瞭な言葉と適切な説明とによって通訳なくして、よく生徒に理解せしめ得た。斯くしてその祈禱の生活は学院の事業の上に、又多数学生の思想並に生活の上に強く反映して居た。(略)」と。  
(pp.23-24, 『岡田山の五十年』 pp.33-34.)

新キャンパス建築に当たって、理事会は、祈りのために用いる礼拝堂こそが47年にわたるソール先生の学院への貢献を記念するにふさわしいと決定し、先生の名前をつけることにしました。キャンパスが完成し、献堂式が行なわれたのは1934年4月のことでしたが、ソールチャペルだけは一足早く、1933年10月に献堂式が行なわれました。このときの講話の中でデフォレスト先生はソール先生のことを「祈りの人」と呼んで、先生がいかに祈りを大切にされてきたかを語っています。(昭和8年12月発行『めぐみ』第23号、pp.4-6.)

神戸女学院の精神面の中心となっていた先生の名前が付けられた礼拝堂。チャペルアワーだけでなく、何かの折に訪れて、心癒やされるひと時を過ごしてみたいかでしょう。

## < 雑感 >

金城 盛紀 本学名誉教授

女学院で一番好きなところはどこ？と何度か訊かれたことがある。そのときの気分で、答えはプールになったりテニスコートになったりしたが、図書館をあげたことは一度もなかった。研究室と答えたこともなかった。島国で生まれ育ったにしても、プールでは頭を冷やすぐらいだし、テニスはラケットもろくに振れない下手の横好きでしかない無骨者だ。親しそうに訊いた人たちからは、「へえ」といった眼差しが返ってきたように記憶している。

しかし、女学院でもっともお世話になったのは図書館である。館内で過ごした時間は長くはなかったかもしれないが、私には大きな学恩がある。講義の準備はもとより、論文や著作をまがりなりにも可能にしたのは図書館のおかげである。基本的な文献はほぼ揃っているし、新刊書など必要とされる本は、申し込むだけで購入してくださった。受け入れ手続きが終わると、登録カードまで添えて通知までしてくださった。このような至れり尽くせりの図書館から受けた恩恵、神戸女学院からいただいた数多くの恵みのなかでも大きい。講義や研究成果で十分に報いることができなかつたのは残念だが。

ところで、新館建築の際に、文学部長として出席した教務委員会だったかで、あえて発言したことがある。これが、結果的に恩返し的一端にはなつたかも、という自負の念はないわけではない。新館の建設が必要になつたのは、半世紀も重要な役割を果たしてきた本館が書物で満杯になつたからである。だが、提示された新館建設案は、私にはあまりにも遠慮しすぎであると思われた。予算の問題はあつたはずだが、近視眼的であつた。変化が激しくなつた時代だから、新館も手狭になつたら、その課題は次の世代におまかせしたい、という議論にどうしても納得できなかつた。私にしては珍しく食い下がって、1階かさ上げすることにして妥協した。今思えば、残念ながら（そして、毎度ながら？）、私も近視眼的だつたことには違いない。

研究会で知り合った大阪大学の研究熱心な方に頼まれて、私の名前で蔵書を一冊貸してあげたこともあった。相互利用制度がなかった一昔も前のことで、規則違反にはならなかったかもしれないが（そんな規則があったとしても、もう時効になったか）、便利な制度の個人的な先取りであったと思う。そんなことができるほど、女学院の図書館は、少なくとも私の分野では充実していた。

在職中、いろんな役職に選挙で選ばれ命じられたが、図書館長の職だけは喜んで引き受けた。これも恩返し的一端と思ったからにほかならない。力量不足で満足できる貢献はできなかったが、教授会で追求されたことはある。

阪神大震災で建物はびくともしなかったが、館内は書棚や本が散乱して大混乱した。地震に襲われたとき、学生たちはもとより誰も館内にいなかったのがせめてもの慰めだった。書架の間に一人でもいたら、たいへんなことになったはずだ。教授会が開催できたのはある程度落ちつてからではあったが、蔵書資料の整備が遅すぎて閲覧貸出ができないということで、本がきれいに並べられた街の書店も例に出されて、きびしいお叱りを受けた。研究熱心ゆえの焦りであり怒りではあったであろう。しかし、図書館の書物を配列する作業は誰でもすぐできるわけではなく、どんなに手間暇がかかるか、説明してご理解を乞うほかなかった。必死の努力を続けている職員のみなさんに対して、私は頭を下げるだけであった。

西宮に関する歴史資料を寄贈したい、という申し出をいただいたこともある。素人目には貴重有益と思われたので感謝して頂戴したいと思い、念のため、事務方に相談したところ、新館ができてからではあったが、やはり収納スペースの問題で受け入れがたい、ということであった。私自身、5年ほど前に、西宮の集合住宅に引っ越しをした際、多くはない書物も「断捨離」せざるを得なくなった。役に立ててもらえそうな本は、大学院の修了生たちにリサイクル利用をお願いした。

女学院の図書館は雰囲気もいい。仕事とは関係なく、読みたくなる本が山ほどある。読めなくても、いろんな本が招いてくれる。インターネットの探索では味わえない手触り感がある。古い書物の重み、新刊書の香り。安心感もある。書物を一心に読んでいる周りの人たちの姿は疲れた身には励みになり、イライラしているときには慰めにもなる。きれいな学生たちがますます輝く。

定年退職して14年、いまはたまに立ち寄るのだが、学生たちの姿が少なくなっているような気がする。青春はあっという間に過ぎ去るのに、もったいない。鞭を打てば折れそうになった老骨でも、神戸女学院図書館は背筋を伸ばし、楽しませてくれる有難い場であ

る、と思うのだが。

### <編集後記>

Veritas 47号いかがでしたでしょうか。原稿をお寄せくださいました、先生方、職員の方々、どうもありがとうございました。

さて、長らくお待たせいたしました。図書館のホームページをリニューアルいたしました。データベース一覧のページも一新しています。ご覧になって、気がついたこと、ご意見・ご感想などをお寄せいただければ、うれしく思います。

それから、この4月より、定期的に、図書館長の濱下先生を囲んで、ニーチェ『ツァラトゥストラ』の読書会を開いています。日程はホームページや掲示（図書館新館の掲示版）をご覧ください。興味がある方は、本（どの翻訳書でも結構です）を持参の上、ご参加ください。途中の回からの参加も歓迎いたします。それでは、皆さま、どうぞよい夏休みをお過ごしください。